

〔学術論文〕

中国人就学生の生活世界と日本語教育 —名古屋市の就学生を事例に—

The Daily Life of Chinese Pre-college Students Living in Nagoya :
Their Problems of Learning Japanese

山田陽子
Yoko Yamada

要旨 本稿は、中国人就学生への参与観察および面接質問紙調査・聞き取り調査から、かれらの生活と日本語学習における課題を検討するものである。

調査対象の名古屋市居住中国人就学生は大学・大学院・専門学校などの進学にあたり、受験費用・入学金等経済面で相当の自助努力をしている。就学生は、家族を伴う日本への移民ではなく、単独で国境を越えた長期滞在者である。中国の親から経済的援助のない場合が多い。

日本語学習に関する課題については、参与観察の結果から調査対象者は「聴解」に学習困難があると推察できた。本稿での聞き取り調査により、日本語学校の授業科目（「文法」、「読解」、「聴解」、「会話」、「作文」）の内、就学生が最も困難と感じているのは、来日後まもない初級クラス生も来日後1年以上経過した中・上級クラス生も滞日期間に関係なく、「聴解」であることが実証された。そこで中国人就学生を手がかりに外国人全般の日本語教育に繋がる「聴解」学習の再構築とともに生活面の課題を検討する。

キーワード：中国人就学生、日本語学校、聴解、日本語教育

はじめに

わが国の日本語教育機関（日本語学校・専門学校日本語科等）に在籍する就学生等の数は、平成8年度（以下各年度は7月1日現在、財団法人日本語教育振興協会調べ）には11,224人であったが平成19年度には31,663人に増加している。一方、財団法人日本語教育振興協会の維持会員である日本語教育機関は、全国で平成8年度に287、平成19年度には383機関にのぼる。「就学」の在留資格による国籍別外国人登録者数は、中国人が最も多く、在留資格別新規入国者総数28,147人の内、15,915人となっている（法務省「入国管理」平成17年度）。

「就学生」というのは、就学ビザを取得し、日本各地の日本語学校・専門学校等で日本語を学ぶ外国人学生のことである。就学生のうち、圧倒的多数を占める中国人就学生は来日後、日本語学校でどのような学習をしているのであろうか。これまでの研究では「就学生」をめぐる学習環

境や日本語教育の実態に関する議論は、あまりなされていない。「留学生」に関する研究は、葛(2007)、岡・深田(1995)などに見られる。葛(2007)は、中国人留学生の異文化適応に関して、それに影響を与える個人属性を検討し、日本語能力、専攻、奨学金の3つが言語的コミュニケーションおよび対日感情と、さらに子どもの有無、年齢、滞日期間が言語的コミュニケーションにそれぞれ強く関連していることを明らかにした。また岡・深田(1995)は、日本の外国人留学生受け入れ政策や経済的側面、社会的支援の実態等から日本における留学生の諸問題を分析した。しかし、これらには就学生が一日の生活の重要な部分を占める日本語学校における実態、たとえば日本語教師との関係や社会的ネットワーク、日本語教育の問題点に関してはあまり述べられていない。

今日、私たちのすぐ身近にも中国人就学生は生活している。多言語・多文化化が進行する現在の日本で、増加している中国人就学生の日本語教育現場における問題を探究することによって多様化した学習者の日本語教育に生かしていくことが今日的な課題ではないだろうか。

1. 名古屋市の日本語教育機関

大学の留学生別科を除いて名古屋市内にある日本語教育機関数(日本語学校)は、11である(日本語教育振興協会、2007)。全国の日本語教育機関数383(平成19年度)のおよそ3%に当たる。日本語教育機関組織は、次のように設置形態がさまざまである。

表1：名古屋市内の日本語学校設置形態と特徴

設置形態	株式会社 4	有限会社 3	学校法人 3	財団法人 1	合計 11
特徴	①学生の大半を中国人が占める日本語学校が多数存在する。 ②民間会社設立の日本語教育機関が多い。 ③名古屋市営地下鉄の駅から近い場所にある。 ④就学生進学先は東海地方の大学、とりわけ名古屋市内の国公立大学が多い。				

また、名古屋市に居住する就学生ならではの特徴は、志望大学に自動車関連の高等教育機関(自動車短期大学等)を選択する学生の存在である。トヨタに関心が高く、自動車技術を学び母国での自動車整備会社の起業希望やトヨタ系企業への就職期待がある。さらに名古屋市には中国人就学生を雇用するコンビニ・飲食店が多いため、就学生は複数のアルバイトをしながら日本語学校に通っていることである。生活費と授業料を自分ですべて賄い、中国の家族から経済的支援はほとんどない。2008(平成20)年7月現在、名古屋市の日本語学校11校に在籍する就学生は905人で、この内中国人就学生は634人を占め(エイ・アイ・ケイ教育情報部編、2007)、全体の70%に当たる。

2. 中国人就学生への聞き取り調査

2-1. 調査対象者のプロフィール

調査対象である中国人就学生 62 人の出身地は中国各地におよぶが、最も多いのが広西壮族自治区、続いて福建省、そのほかでは遼寧省、黒龍江省などの東北地域出身者が多い。また、調査対象者は、都会出身者よりも地方の農村部や工業都市からの出身者が多いといえる。

名古屋市内の日本語学校で学ぶ中国人就学生 62 人（19 歳～27 歳）に対して日本語で聞き取り調査を実施した。実際に面接して質問をする方法をとった。62 人全員が日本の大学（あるいは大学院・短期大学・専門学校）に進学する目的をもって来日している。日本人の場合、一般に大学受験年齢は 18～19 歳くらいであるのに比べると就学生の平均年齢は高い。調査対象以外の就学生の中には、中国の大学を卒業後、しばらく働いてから来日した 30 代の者もある。

調査対象の中国人就学生プロフィール

表 2：性別 (人数)

男性	26
女性	36
合計	62 人

表 3：出身地 (人数)

広西壮族自治区	20
福建省	19
遼寧省	6
黒龍江省	6
上海市	4
その他	7
合計	62人

2-2. 面接質問紙調査

使用言語は日本語で、実施期間は 2007 年 9 月から 2008 年 9 月にかけての 13 カ月間である。調査対象者は 11 の日本語学校（財団法人日本語教育振興協会認定校）からの任意抽出で、調査時点での滞日期間が 1 年半、1 年、半年の 3 段階に分けられる。〈 〉は、質問内容を表す。（質問項目は 1～9）

1. 〈あなたが日本語学校で学んでいる授業科目のうち、一番簡単だと感じているものはどれですか？〉

表 4：最も簡単と感じている科目

授業科目	人数	%
会話	15	24.2
文法	14	22.6
読解	13	21.0
聴解	12	19.3
作文	8	12.9
合計	62 人	(100%)

表 5：滞日期間別

滞日期間	半年	1 年	1 年半	人数
会話	3	3	9	15
文法	6	3	5	14
読解	4	4	5	13
聴解	2	4	6	12
作文	4	2	2	8
合計	19	16	27	62 人

中国人就学生が最も簡単と感じているのが、「会話」であることが明らかになった。来日後 1 年半の日本語学習で大半の就学生が「会話」に困難を感じなくなる。

2<あなたが受けている授業科目のうち、一番むずかしいと感じる科目はどれですか？>

表6：最も難しいと感じている科目

授業科目	人数	%
聴解	29	(46.8)
作文	12	(19.4)
文法	9	(14.5)
読解	8	(12.9)
会話	4	(6.4)
合計	62人	(100%)

表7：滞日期間別

滞日期間	半年	1年	1年半	人数
聴解	11	6	13	29
作文	0	6	6	12
文法	3	1	4	9
読解	3	2	3	8
会話	2	1	1	4
合計	19	16	27	62人

およそ2人に1人は、「聴解」の授業を難しいと感じている。滞日期間に関わらず、中国人就学生が最も難しいと感じているのが「聴解」の授業（滞日1年の学生の場合は、「聴解」と回答したのは、「作文」と同じ6人）であることがわかった。これは参与観察から推察していたことであったが、本調査によって実証された。

3<日本語学校で学ぶ目的は何ですか？>

表8：来日目的調査

目的	人数	%
日本で就職したいから	15	(24.2)
中国へ帰り、日本企業に就職したいから	13	(21.0)
中国へ帰り、日本語教育や日中交流の職につきたいから	8	(12.9)
日本で会社を経営したいから	6	(9.7)
将来、通訳の仕事をしたいから	5	(8.0)
中国で貿易会社を経営したいから	5	(8.0)
観光ガイドになりたいから（日中、どちらでも）	3	(4.8)
不確定	7	(11.3)
合計	62人	(100%)

表9：滞日期間別

滞日期間	半年	1年	1年半	人数
日本で就職したいから	1	5	9	15
中国へ帰り、日本企業に就職したいから	4	5	4	13
中国へ帰り、日本語教育や日中交流の職につきたいから	6	0	2	8
日本で会社を経営したいから	1	5	0	6
将来、通訳の仕事をしたいから	1	0	4	5
中国で貿易会社を経営したいから	1	4	0	5
観光ガイドになりたいから（日中、どちらでも）	1	1	1	3
不確定	0	7	0	7
合計	15	27	20	62人

日本での生活がスタートした直後より1年後、1年半後のほうが日本での就職願望は高くなる傾向が見られた。日本語能力と就職願望は連関している。すなわち日本語能力向上につれて、中国人就学生の日本での就職意識は変容し、次第に日本での就職願望が高くなることが確認された。不確定の就学生を除けば、日本との関係を維持する分野、たとえば日系企業への就職や日中交流関係、日本語教師などの職を獲得する目的で学ぶ就学生が多い。

4 <困ったときに、相談する人は誰ですか？>

表 10：滞日期間別 就学生の社会的ネットワーク

	半年	1年	1年半	人数
友人（中国人）	3	2	9	14
母親	3	1	5	9
アルバイト先の人（中国人）	3	5	1	9
父親	2	1	1	4
兄弟姉妹	0	2	1	3
中国での勤務先の人（日本人）	2	0	1	3
日本語学校の教師	1	0	1	2
親戚	2	0	0	2
アルバイトの先の人（日本人）	1	0	0	1
恋人	1	0	0	1
警察	1	0	0	1
夫（結婚している学生もいる）	0	0	0	0
祖父母	0	0	0	0
誰にも相談しない	0	5	8	13
合計	19	16	27	62人

この調査結果から、困ったときに相談するのは身近な家族や友人がほとんどで、日本語学校の教師に相談することは、あまりないことがわかった。就学生は相談内容を教師に話す際に日本語能力を問われることを危惧しているからである。本調査から明らかなように、中国人就学生 62 人中、13 人は誰にも相談しないと答えている。日本に来て困ったことは、後述（質問 9）のように多くあるにも関わらず他人に相談することはない。困っていることを他人に知られたくないという就学生の特徴も参与観察から確認されている。

5 <日本に来て、楽しかったことは何ですか？>

表 11：就学生の楽しみ（全調査対象者集計）

楽しかったこと	人数
寝ること	12
日本語の勉強	11
日本語学校の生活	11
アルバイトで給料をもらったこと	11
中国へ一時帰国したこと	4
中国のお菓子を食べること	2
サッカーをすること	1
家族に電話すること	1
中学校時代を思い出すこと	1
高校時代を思い出すこと	1
初めての外国生活	1
ブランドバッグを買ったこと	1
友だちからの手紙	1
てんぷらうどんを食べたこと	1
仕事（アルバイト）の初日	1
家族との旅行	1
デート	1
合計	62人

就学生は、連日連夜のアルバイトと日本語学校授業の両立とで疲労が慢性的に蓄積しており、「寝るときが最も心の安定を得られる」と回答している。

進学に際しての聞き取りから

日本の大学・大学院・専門学校進学に際して、就学生が最も困ったことは、受験情報（たとえば、大学の選択、大学の受験日、入学試験の方法、試験の難易度、受験に必要な学習内容、受験書類の入手方法、面接時の服装、自己紹介の仕方、面接試験会場での試験官への応答要領等）が乏しいことである。

6<あなたは将来、日本に住むつもりですか？>

表 12：日本への定着意思

将来	人数	%
中国へ帰る	36	(58.1)
日本に住みたい	22	(35.5)
未定	4	(6.4)
	62人	(100%)

就学生の過半数は、定着意思がなく、大学卒業後は中国に帰ると回答している。しかし中国に帰らず日本で就職してそのまま日本での生活を希望する学生も 35.5%と、およそ 3 人に 1 人は日本への定着意思がある。

次に中国での教育歴を調べることにした。

7<あなたの学歴を教えてください>

表 13：中国での教育歴

学歴	人数	%
高校卒	22	(35.5)
専門学校卒	16	(25.8)
大学卒	10	(16.1)
大学中退	3	(4.8)
短大卒	3	(4.8)
不明	8	(12.9)
	62人	(100%)

昨今の日本語学校入学者の顕著な傾向として、高学歴の学生の増加が認められる。中国において大学を卒業してから来日し、日本語学校に入学する学生が、上の表のように 16%を越えている。6人に1人は大学卒の学歴を有し、短期大学卒を含めると 25.7%を占め、4人に1人は短大以上の教育歴がある。高学歴学生の入学数は1昨年より昨年の方が増加しており、さらに昨年より今年のほうが多く、高学歴化傾向の持続が見られる。大学卒の就学生からは「大学を卒業しても、中国で希望の職を得られないことが多いため、日本でさらに学歴アップをはかりたい」との回答

が多い。大学卒の就学生は日本語学校で2年間日本語を学び、日本の大学院を受験する。

続いて就学生の父親が中国でどのような職業に就いているかを調べた。

8<あなたのお父さんの職業を教えてください>

表 14：父親の職業

	人数	%
会社員	20	32.3
会社経営者	16	25.8
無職	5	8.1
公務員	4	6.5
店主	3	4.8
技師	3	4.8
運転手	3	4.8
工具	2	3.2
建築業	2	3.2
修理工	1	1.6
農業	1	1.6
医者	1	1.6
学校教師	1	1.6
合計	62人	(100%)

父親の職業は「会社員」と「会社経営者」という回答が多数を占めるが、それ以外については公務員、技術者、農業など多様である。高収入を獲得できる職業に就く父親も存在するが、職のない父親も5名(8.1%)存在している。聞き取り調査から、子どもを日本へ送り出す際に多額の借金をしている親が存在することも判明しており、親の子に対する学業・就職期待は高い。

次に、就学生の困り事について自由記述を求めた。

9<日本に来て困ったことは何ですか？>

(就学生より得られた自由記述の内、主な回答をあげると次のようになる)

a. 日本語の問題 (ことばの面)

来日して半年

- ・ 漢字が覚えられないので、作文はひらがなでしか書けない。
- ・ 授業中、先生の話が聞き取れず、先生に何と答えたらよいのか分からなかった。
- ・ 日本語を上手に話せないで、自分の意見をうまく伝えられない。
- ・ 何度もアルバイトに応募したが、日本語ができないという理由ですべて断られた。

来日して1年

- ・ ことばがわからなくて、相手の言うことが理解できない。

- ・ アルバイト先で、給料の明細を見たところ、労働時間に対して少なかったため申し出た。しかし、うまく日本語で交渉できず諦めるしかなかった。
- ・ ことばがわからなかったため、アルバイト先でミスをおかした。
- ・ 大学進学の情報日本人学生に比べて得にくい。
- ・ 大学に進学したいが、試験問題が解けるか心配である。

来日して1年半

- ・ 日本語が上手ではないという理由から、時間給が日本人より低い。
- ・ 日本語がわからないことから、日本人との交流ができない。なかなか日本人の友だちができず寂しい。

b. 経済面

来日して半年

- ・ 日本の物価高に驚いた。

来日して1年

- ・ 食料品、家賃が高くて生活が苦しい。

来日して1年半

- ・ 大学に進学できたとしても4年間授業料が払えるか、とても心配。
- ・ アルバイトを一生懸命しているが、自分のほしいものが何も買えない。
(アルバイトは、居酒屋厨房・レストラン皿洗い、ビル清掃など単純労働・ブルーカラーの仕事が多い。また2年の就学期間内に同じ職場で長く働くことは少なく、職場を複数回変わるのが特徴である。)

3. 日本語学習の課題

就学生への聞き取り調査から得られた知見に基づき、今後の望ましい教育方法について、これまでに提案されてきた指導法からの考察を試みたい。

3-1. 聴解に必要な現場臨場感

一連の調査から、学習面でわかったことは、2年間の就学生活の中で、来日してまもない日本語学習時間が短い学生は「文法」が一番簡単と答え、来日後1年以上経過した日本語学習時間が長い学生は、「会話」が一番簡単と答えている。また一番難しい学習項目は、来日後まもない学生も来日後1年以上経過した学生も「聴解」と答えていることである。ただし、これには当然ながら、教師の力量が影響していることも考慮に入れなければならない。

それでは、どのように「聴解」を指導したらよいのだろうか。就学生にとって「聴解」がどうしてそんなに難しいのか、学生に対する質問では「テープ教材の話すスピードが速く、とても聞き取れない」と回答している。実際に、テープ教材で流れる日本人の話し方は無感情で抑揚に欠

け、街角で耳にする日本人たちの会話に比較すると、ゆとりと間（ま）のない速い会話と知覚される。あらかじめ声を録音したテープを聴解教材として使用するのであれば、実際の日本人同士の会話場面をテープに収録し、それを教材として使用したり、教師自らの声で通常話す速さの朗読テープを作成したりするなど実際場面との隔たりをなくし臨場感を味わえるような工夫が必要ではないだろうか。

筆者が収集した会話データの中で、ファミリーレストランにおける母娘二人の会話は、10秒間に62拍（他の要因を考慮しなければ1分あたり372拍）、日本語能力試験1級聴解問題のCDから流れる男性の話す速度は27秒間に202拍（同、1分あたり449拍）であった。柴田（2007）は、NHK夜7時のニュースにおいて男性アナウンサーの話す速度が1分あたり390～470拍程度であり、日本語能力試験3～4級の学習者ではついていけないと述べている（柴田、2007、40）。このことからわかるように、日本語学校在籍就学生は日本語能力試験3～4級程度のため、日本語能力試験聴解問題における話の速度にはついていけないのである。一方、日本留学試験では「聴解」と「聴読解」に重点が置かれ、学習者がいかに早く情報を読み取るかを問うている。このように昨今の聴解学習における顕著な特徴は、「聴き取りのスピードアップ」が求められるようになってきたことである。

本稿の調査から学生は「聴解」をどのように勉強していいのか、勉強方法がわからないことから勉強意欲を消失することも明らかになっている。さらに「聴解」の授業は、「まったく面白くない。楽しくないからやる気が起こらないし、能力が向上しない」と多数の学生が回答している。

このように「聴解」能力が向上しないのは、①勉強方法がわからないから②楽しくないからという理由で、大半の学生が日本語学校の授業以外には学習していないことが確認された。

日本語教育学会が行った調査（日本語教育学会編、1991）では、日本語能力中・上級段階における聴解指導で、日本語教育機関がニュースや講演などのCDやテープを教材として使用し、「概略の聞き取りや特定の情報に注目して聞く」ことに重点を置き、語彙・文型・文法要素に注目して聞くことは少ないことが明らかにされている。これらの聴解教材は学習者が不明な部分を何回も聞いたり、自分のペースで聞くことができない。また一方的に情報が流れてくるため、言語知識を与える指導ではなく、聴解技術を向上させる指導がなされている（日本語教育学会編（1991）235）。この日本語教育学会調査を踏まえて、同会は聴解指導について次のような提案をしている。

聴解指導の提案（出典：日本語教育学会編（1991）236をもとにまとめた）

- | |
|--|
| <p>①あらかじめ教師が情報構造をタスク・シートにまとめ、学習者がそこに聞き取って書き込む。
 ②概略や特定の情報を聞き取った後、それを文章にまとめたり口頭で発表したり、ディスカッションする。
 ③教師は学習者の作品・作業をモニターして言語的な指導をする。</p> |
|--|

次に、聴解力を上げる7つの「聴解ストラテジー」川口他（2003）を紹介しよう。

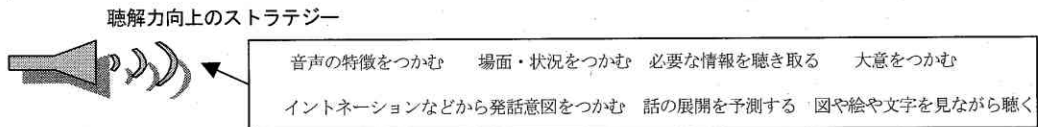
聴解ストラテジー (出典：川口他 (2003) 4-9)

- ①音声の特徴をつかむ (母音の発音、アクセントの移動、母音の無声化などを学ぶ)
- ②場面・状況をつかむ (キーワードから話題を予測する、スピーチレベルの違いにより話者の関係を把握する)
- ③必要な情報を聴き取る (必要な情報部分を聴き取る)
- ④大意をつかむ
(キーワードから話の内容を推測しながら聴く、大事な情報を取り出し全体的な内容を把握する)
- ⑤イントネーションなどから発話意図をつかむ
(アクセントやイントネーションの違いにより発話意図を理解する)
- ⑥話の展開を予測する (呼応する表現に注意しながら聴く、文全体の調子に注意して聴く)
- ⑦図や絵や文字を見ながら聴く (視覚的に提示された情報を手がかりに音声で説明・指示される内容を聴き取る、数字・数量を聴き取り相対的に比較し把握する)

このようなストラテジーを意識する練習を通して、自然にそれらのストラテジーが使えるようになり、自分で聴解力をのばしていける (川口他 (2003) 4) という。

図1：聴解ストラテジーの種類

(出典：川口他 (2003) 9をもとに山田陽子作成)



これまで述べてきたように実際の会話場面では、相手の話す速度を自分の理解可能な速度に調節できない点が聴解の難しさに通じる。しかし、話し手に対する聞き手側の努力や態度等によって相手の話す速度変化や聞き手に理解を促す工夫を引き出せる可能性もある。このようなことから聴解能力を向上させるためには、自然な生活の中で生の人間の声をできるだけ多く学習者にインプットすることと、実際の運用場面に就学生が接触する機会を増やす必要があり、教師側の指導が重要な鍵を握る。

3-2. 再構築活動

聴解は、「音声の受容活動」だと定義されてきたが、近年では様々な知識を総動員して行なわれる能動的・積極的な再構築活動というふうにとらえられる (松崎寛 (2007) 19)。それゆえ、語彙力や文法力がつき、知識も増えないことには聴解能力を身につけることは容易ではないのである。しかし、わからない部分の日本語を推測して判断し、概要がわかることも多い。音自体が聞き取れなくても、文法や語彙の知識、文脈などによって、正しい意味を類推できる場合が多い (金子 (1998) 55) からである。聞き取りを助けるものは、文法の知識、語彙の知識、意味論的文脈、専門的知識、教養的知識である (金子 (1998) 55-58)。このことに留意しながら、教師は指導をあせらず、学習者に諸知識を身につけさせる指導が必要であろう。文法力や語彙力を聞き取りに反映させる方法として、聞き取りにくい音を含む新出語彙の書き取り練習や新出文型の定着確認

のための文レベルの書き取り練習が効果的（金子（1998）59）であるから、まずこうした指導から始め、文法・語彙力を伸長させたい。

学習者が「聴く」ことを困難にさせるものに、「学習者の母語の音体系の干渉」がある（前掲書、54）。たとえば、韓国の学生は「き」と「ぎ」を聴き分けることが困難であるのは、韓国語が「き」と「ぎ」の子音を区別していないからである。このような場合は効果的に聴き取る能力をつけるために、教師が教材作成に工夫して紛らわしい音を聴き分けるように指導することが必要である。教師が学習者の力に合わせて教材を作成し、学習者の反応を見ながら提供するのが最良（前掲書、58）といわれる。こうした事情からも、「聴解」能力向上を目指すならば、指導は学生の能力に応じて個別に行なうと効果的であるが、それには大勢の学生が一同に学ぶ日本語学校の性質上、難しい面があり、教師の相当の工夫と豊富な教材を含めた万全の事前準備が必要である。

3-3. 予習の必要性

日本語学校生に予習を課し、あらかじめ学習のための準備をさせておくと効果的ではないだろうか。授業のイントロダクションで、学習する文法項目等を織り込んだビデオを見せ、ネイティブの会話を聞かせる。ビデオであるため、おのずと教師の手や体の動きから、会話の内容が読み取れる。あらかじめビデオと内容が一致するCDを聞いて予習してきた学生は、内容に関する教師の質問に的確に答えられるようになる。このようにVTR（ビデオ）を活用しながら実践を積み重ねて「聴解」能力を高め、会話の内容を把握できるようにする指導方法も考えられる。就学生にCDでの予習を常態化することで、「聴解」の実力が身につくと思われる。

おわりに

本稿から、教育機関・教師・行政の三者が連携して教育支援や地域支援、日本人との交流支援を積極的に行ない、よりよい学習環境のもとで質の高い教育、よりよい社会環境のもとで安全で快適な暮らしを就学生に提供する必要性が認められた。

さらに日本語教育機関と大学との連携も視野に入れた進学対策の充実に向けた日本語教育を考慮しなければならない。また行政の役割として「就学生」が満足できる日本語教育を受けられるように、「出席率」ばかりではなく、日本語学校・日本語教師・授業内容・教材等の「教育」分野に深い関心を寄せることが重要である。

「就学生」に対してわが国は「留学生」にあるような奨学金制度・経済的支援も乏しかったが、2008年3月19日、日本政府は「留学生」と「就学生」との待遇差を是正する方向で調整し始めた。留学生と就学生の間には在留期間（就学生は6カ月ごとの在留資格更新が必要）やアルバイト時間など待遇差が大きかったが、諸外国と同様に両学生制度を一本化する方向で検討に入った。国際化の次世代を担う就学生へのサポート体制の脆弱さを改善し、日本語教育施策の充実へと方針を転回することで、就学生が安心して学び、暮らせる日本社会へと繋がることが期待される。

本来は、国レベルで日本語学校をつくり、寮を用意し、アルバイトを斡旋し奨学金制度を設けて受け入れるべき(阿部(1996)29)だからである。そして、授業の構築に当たっては、就学生を「生活者」としての外国人という視点から、かれらに生活の現実感をもたせられる「聴解」指導に取り組まなければならない。本稿では中国人就学生に限って述べてきたが、留学生や研修生・外国人全般の日本社会への受け入れというマクロレベルの視点からの検討、名古屋以外の地域に居住する就学生との比較検討などが今後の課題である。また近年インドネシアから介護福祉士・看護士候補生の受け入れをめぐる動きも活発化している。将来、介護・福祉・医療を外国人が担うことも視野に入れ、多様な日本語教育のあり方を考えなくてはならない。

[参考文献]

- 阿部精二(1996)『中国人就学生—泣き笑いの記録—』白帝社
- 石附実(1996)編著『比較・国際教育学』東信堂
- 梅田康子(2006)「日本語予備教育における内容重視型日本語教育の試み—留学生別科における「日本事情」に関する一考察—」愛知大学『言語と文化』No.15、59-78
- エイ・アイ・ケイ教育情報部編著(2007)『日本語学校全調査』エイ・アイ・ケイ出版部
- 遠藤織枝編(2006)『日本語教育を学ぶ—その歴史から現場まで』三修社
- 岡益巳・深田博己(1995)『中国人留学生と日本』白帝社
- 奥田道大・田嶋淳子編(1995)『新版池袋のアジア系外国人—回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店
- 葛文綺(2007)『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社
- 金子比呂子(1998)「聞くことの指導法」姫野昌子他『ここからはじまる日本語教育』53-66、ひつじ書房
- 川口さち子他(2003)『上級の力をつける—聴解ストラテジー』凡人社
- ぐるーぶ赤かぶ編著(1989)『あぶない日本語学校—アジアからの就学生』新泉社
- 小林哲也・江淵一公編(1985)『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化』九州大学出版会
- 今野康祐・堀建司郎編(1993)『ニホン語の国際化—日本語学校の実情』創現社出版
- 財団法人日本語教育振興協会(2007)『2008日本語教育機関要覧』同会
- 財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金(2008)『平成19年度日本語能力試験1・2級』凡人社
- 柴田実(2007)「『やさしい日本語』の音声化」『やさしい日本語』が外国人の命を救う—情報弱者への情報提供の在り方を考える—』国立国語研究所報告書
- 田尻英三他(2004)『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房
- 第5次出入国管理政策懇談会(2008)『報告書「新たな在留管理制度に関する提言」』同会
- 日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

- 法務省入国管理局就学生受入れ問題懇談会（1994）『日本語就学生の受入れの在り方—入国・在留の問題点と課題』入管協会、平成6年3月31日
- 細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践—』明石書店
- 本田弘之（2006）「日本語教育の『自律』と『変容』—中国東北地域における『満州国』後の日本語教育の意味—」『言語政策』2、91-108、日本言語政策学会
- 真嶋潤子（2006）「日本語教育から見た異文化理解」細谷昌志編『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』世界思想社、85-103
- 松崎寛（2007）「シンポジウム『聴解教育の方法と可能性』」『日本語教育学会予稿集』19、同会
- 宮崎里司、ヘレン・マリOTT編（2003）『接触場面と日本語教育—ネウストブニーのインパクト』明治書院
- 山田陽子（2008）「村ぐるみの日本語教育—1970～80年代の中国帰国子女への地域支援として—」日本語教育学会編『2008年春季大会予稿集』202-203、日本語教育学会
- 山田陽子（2008）「中国帰国子女と家族への日本語教育—1970年代に開始した村—」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』No.9、141-153
- 山田陽子（2008）「『中国帰国者』の定着自立援護—子女教育と生活支援』編集委員会編『満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶』697-736、不二出版
- 山田陽子（2007）「『中国帰国者』二世の適応に関する一考察—二世女性の語りから」村井忠政編著『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生—グローバル時代の日系人』68-91、明石書店
- 山田陽子（2006）「中国帰国者の日本語習得と雇用—国家賠償請求訴訟における帰国者の陳述および身元引受人の語りから—」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』No.5、83-100
- 吉武保子（1995）『あやしい日本語学校』ビジネス社

新聞

朝日新聞 2008年6月4日朝刊、25社会14版「外国人登録、中国人トップに」

ネット検索

財団法人日本語教育振興協会ホームページ <http://www.nisshinkyu.org/>

本研究は、愛銀教育文化財団助成研究成果の一部である。

（研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、2008年10月17日付）。